

## ■解説者佐伯恒夫と火星クレーター・サエキ (2006)

### 1. プラネタリウム界のパイオニア佐伯恒夫

2006年、火星のクレーターに日本人として初めてサエキの名前がつくことになった。火星の表面模様や気象現象の観測で国際的にも知られていた故佐伯恒夫(1916-1996)を記念したものである。

佐伯は電気科学館が開館して3年後の昭和16年、プラネタリウムの解説要員として採用され、昭和47年頃まで在職していた。その流暢な語り口には定評があり、多くの見学者に感銘を与えた。また、電気科学館プラネタリウム部門の責任者として大阪市のみならず、全国的にも活動の幅を広げ、電気科学館の顔としても活躍した。プラネタリウム導入初期に解説者となり、さまざまな工夫を重ね、現在に続くプラネタリウムの生解説のパターンを確立したという点においてプラネタリウム界のパイオニアの一人であった。

また、天文教室等の普及教育活動でも大いに能力を發揮し、その指導によって天文学研究者も育っていった。研究活動では火星の表面形態や気象現象の観測的研究を行った。その頃は世界的にも余り注目されることのない分野であったが、宇宙開発時代を迎え、惑星探査が具体的に射程距離に入るようになると、佐伯の月面や火星面観測ががぜん注目を集めることになった。そうした業績が評価され、火星面に日本人として初めてその名がつくことになったものである。

佐伯は、教育普及活動は確かな学識に裏打ちされた経験に基づいてなされるべきであるという博物館学の基本をまっとうしようと奮闘し、実践できた稀有な例であった。生前、筆者に対し再三、「電気科学館の首脳部にはその理解がなく、資料収集・調査研究は無用であって、プラネタリウム解説などの普及活動だけ行っていれば良いと言うばかりで困った。だから、研究や執筆はもっぱら自宅で行ない、著書には所属を全く記していない」と言っていた。同様のことは現在でもしばしば散見されることであるが、そうした周辺の無理解を個人的な努力で克服していったのが佐伯であったと言えよう。

### 2. 佐伯さんを巡って

佐伯さんは退職後もしばしば元の職場に顔を見せてくれていたので、私たち後輩はいろいろアドバイスを戴く機会があり、それは大きな励みとなり、円滑な業

務運営にとっても役立った。

このように割と密な関係だっただけに、改めて佐伯さんに原稿を、というような声が出る機会はなかったが、いよいよ電気科学館が開館ということになったため記録の意味を込めて執筆をお願いしたのが参考文献【1】【2】の記事であった。中には聞いていなかったことも記されており、原稿をお願いして良かったと一同思ったことだった。

そう思うと、原口氏雄さんや、高城武夫さん、神田壱雄さんなどからもプラネタリウム界黎明期のお話をいろいろ伺ったのに、書いていただく機会がなかったのは、今思うに、かえすがえすも残念なことである。原口さんは電気科学館開館時のスタッフであり、東日天文館の開館にあたって大阪から派遣された方だけに話がダイナミックで、その後、大阪府茨木市の市会議員として中央公民館のプラネタリウムを設置したこともあり、たくさんの情報をお持ちであった。高城さんは開館直後の科学館のスターであり、当時は自ら立ち上げた和歌山天文館を活動拠点とし、天文教育界の重鎮であった。いわゆる「お大尽」の風格があり、幅広い人脈と幅広い知識をお持ちであった。神田さんの原点は北廻船の船宿(だったかと思う)に誕生したことにあって、航海の方から天文に入ったというユニークな方で、旧暦や年中行事にめっぽう詳しく、そうした方面にまるで知識のない筆者には驚異であった。そして、市民生活に密着した科学館という施設には欠くべからざる知識であることを悟った。

### 3. 火星クレーター・サエキ

Saheki 命名の件は2006年1月21日の朝日新聞大阪本社版夕刊に掲載された(【3】)。これに対し、中西美和子さんが朝日新聞に思い出を投書された(【4】)。中西さんの甥が宇宙飛行士の野口聡一さんであるという。【5】は佐伯さんが観測した火星面のフレアー現象をめぐる話で、アメリカのSky & Telescope誌に掲載されたものである。

なお、佐伯さんは長らく東亜天文学会を基盤に活動されていた。同会のホームページおよび関連ページのアドレスは以下のとおり。

<http://www.amy.hi-ho.ne.jp/oa-web/index.htm>

[http://www.mars.dti.ne.jp/~cmo/oa\\_mars.html](http://www.mars.dti.ne.jp/~cmo/oa_mars.html)



佐伯恒夫 (1916-1996)。1959 年撮影



夏の講座で講義する佐伯。1968 年

#### 参考文献

【1】佐伯恒夫:1989、「プラネタリウムの憶い出(1)」、月刊うちゅう、1989年5月号、大阪市立電気科学館星の友の会

【2】佐伯恒夫:1989、「プラネタリウムの憶い出(2)」、月刊うちゅう、1989年6月号、大阪市立電気科学館星の友の会

【3】朝日新聞 2006年1月21日大阪本社版夕刊 「観測の鬼」火星の地名に

【4】朝日新聞 2006年2月6日大阪本社版 投稿欄 佐伯先生の名 火星の地名に

【5】Sky and Telescope 110, No. 6 (Dec.), p. 112, 2005 Renowned Japanese Mars Observers

資料1. 【3】朝日新聞 2006年1月21日大阪本社版夕刊から

「観測の鬼」火星の地名に  
日本人で初 故・佐伯恒夫さん  
スケッチ50年 プラネタリウム名解説

大阪市のプラネタリウムの名解説者として知られたアマチュア天文家の故・佐伯恒夫さん(1916~96)の名が、火星の地名になる。大型クレーターの一つが「Saheki」と命名され、今年8月にある国際天文学連合(IAU)の総会で正式に決まる。日本人の名前が火星の地名につけられるのは初めてという。

火星のクレーターには人名や小都市名などがつけられる。地動説のコペルニクス、進化論のダーウィン、新大陸「発見」のコロンブスなどの人物が名を連ねている。

佐伯さんの教えをうけた広島県廿日市市の元プラネタリウム解説員、佐藤健さん(67)が01年にIAUに提案し、このほど内定の連絡が届いた。このクレーターは火星の南半球にあり、直径85キロ。

佐伯さんは独学で天文学を学び、大阪市内の自宅などで50年間にわたって火星を観測して詳細なスケッチに記録した。謎の閃光現象や灰色の雲などの観測で世界的に知られる。

一方で、41年から71年まで大阪市立電気科学館(現・大阪市立科学館)でプラネタリウムの解説を担当。著書やテレビ・ラジオなどを通じて天文学の普及に力を尽くした。アマチュア天文家を中心の東亜天文学会や、日本暦学会の会長も務めた。

佐藤さんは『「火星観測の鬼」と呼ばれ、火星に一生をささげた佐伯先生の名前が火星に刻まれることになって大変うれしい」と言う。

佐伯さんの長男で兵庫県伊丹市で環境関連会社を営む雅夫さん(59)は「長年にわたる功績が認められて、父も喜んでいると思います」と話している。

(杉本潔記者)

資料2. 【4】朝日新聞 2006年2月6日大阪本社版投稿欄から

佐伯先生の名 火星の地名に  
無職 中西 美和子 (大阪市東住吉区74歳)

5. 電気科学館が話題となった文献類

大阪市立電気科学館(現・市立科学館)でプラネタリウムの解説をしていたアマチュア天文家の故・佐伯恒夫さんの名前が、火星の大型クレーターの一つにつけられるという記事を読みました。私も少女の頃、父に連れられて弟とプラネタリウムを見に行くのが楽しみでした。

戦時色の濃い世の中でしたが、電気科学館だけは美しい夜空を見て夢をふくらませられる唯一の場所でした。佐伯先生の解説は私たちにもよく分かるように親切な話しぶりで、火星に力を入れて観測しておられるのが伝わってきました。

少し赤い星のスケッチも見せて頂きました。天体望遠鏡をのぞく機会はありませんでしたが、小さなファ

ンのひとりでした。作業服で、腰に手ぬぐいをぶらさげたお姿を尊敬して見ていました。

プラネタリウムがきっかけとなり、弟は空への興味を持ち続けていたようです。やがて、弟の子どもが大きくなって花を咲かせることになりました。宇宙飛行士の野口聡一です。

いつか人類は火星へ到達する日が来るでしょう。先生の名前を刻んだ場所が永遠に伝えられるのを、心からお祝い申し上げます。

資料3. 【5】 Sky and Telescope 110, No. 6 (Dec.), p. 112, 2005 から

■ the astronomy scene

## Renowned Japanese Mars Observers

By William Sheehan and Masatsugu Minami

There might be no more passionate observers of Mars than the Japanese. One would guess that this must be a result of Percival Lowell's 10-year association with Japan. But it was really Lowell's one-time Mars associate, William H. Pickering, who inspired the country's first studies of the Red Planet through his encouraging correspondence with Kaname Nakamura. A skilled telescope maker and one of the first serious Mars observers of the Oriental Astronomical Association, founded in 1920, Nakamura died in 1932. By the time of the planet's great opposition in 1939, there were several leading Japanese observers. They included Eitaro Date (who lived near Osaka), Shizuo Mayeda (Kyoto), Shigemaro Kibe (near Kyoto) and Sadao Murayama (Tokyo). In contrast to Nakamura, who drew the planet in Pickering's abstract style, they adopted the more naturalistic style of Greco-French artist-astronomer E. M. Antoniadi.

The greatest of all Japanese Mars observers, however, occupying a legendary place similar to that of Giovanni Schiaparelli, Lowell, and Antoniadi in the West, was undoubtedly Tsuneo Saheki, who was born in 1916, the year of Lowell's death. A bespectacled, resolute-looking young man, in 1937 Saheki observed the Red Planet with Kwasan Observatory's 31-centimeter (12-inch) Cooke refractor in Kyoto and detected a tiny bright spot later called Antigonos Fons. This spot was confirmed by E. C. Sipher at Lowell Observatory on photographs taken two years later.

Top: A page from Tsuneo Saheki's notebook showing his observation of the July 1, 1954, flare in Edom Promontorium. His sketch bears a similarity to the flare-up recorded on June 8, 2001, in the same region on video images obtained by a team of observers in the Florida Keys.

Bottom: Saheki's drawing on September 7, 1956, reveals a remarkable series of "oases" in the planet's Tithonus Sinus region. This rendition bears a remarkable similarity to the frontispiece of Percival Lowell's 1895 book, Mars.

Saheki missed the 1939 perihelic opposition, however; he was required, during those troubled times, to serve in the Japanese army in China. After his discharge, he worked at Osaka Planetarium and built an 8-inch Newtonian reflector, which had an excellent mirror made by Kibe.

Saheki achieved international fame on December 8, 1951, when, on a tiny 5.3"-wide disk of Mars, he noted a brilliant flare at Tithonus Lacus. "At first I could not believe my sight because the appearance was completely unexpected," he wrote. Shortly after news of Saheki's observation reached Europe, British astronomy writer Patrick Moore received a telephone call from the science writer of a London daily newspaper eager to hear his comments about "the atomic bomb that had gone off on Mars."

On July 1, 1954, Saheki observed another flare, this time at Edom Promontorium; it lasted only 3 to 5 seconds and attained a maximum brilliance estimated at half that of the south polar cap. Since then, a number of other flares have been recorded over the years, with Japanese observers being responsible for most of them.

Saheki's observations inspired S&T contributing editor Thomas Dobbins and one of the authors (Sheehan) to monitor Edom in 2001, when the viewing geometry of the region would be similar to that seen by Saheki (S&T: May 2001, page 115). As described in that year's September issue, page 112, a flare was indeed observed just as predicted, from the Florida Keys that June.

The origin of the flares remains a mystery. They occur in some of the most intriguing parts of the planet: Tithonus Lacus, which encompasses features now designated Tithonium Chas-

ma and Nactis Labyrinthus, often brims with morning mists and ice fogs, while Edom Promontorium lies in Meridiani Planum, where NASA's Opportunity rover landed in January 2004.

The flares probably involve atmospheric phenomena of some sort. Lunar and Planetary Institute scientist William Hartmann speculates, "I favor sudden formation or dissipation of clouds for many of the bright spots (clouds can materialize within minutes). Maybe some have flat-lying ice crystals so we really do get 'sub-solar' sorts of specular reflections; or maybe in an existing cloud the air gets still for 10 minutes and the crystals all align, but the slightest winds aloft are sufficient to disrupt them."

Whatever they may be, Saheki, who died in 1996 at age 80, deserves great credit for having seen those flares even with the Red Planet being so far from Earth, and using no more than an 8-inch telescope. His name will always stand very high among the observers of Mars. \*

WILLIAM SHEEHAN is a psychiatrist based in William, Minnesota, while MASATSUGU MINAMI is the OAA's Mars Section director.



Tsuneo Saheki with his 8-inch reflector in 1946.

5. 電気科学館が話題となった文献類

資料4. プラネタリウム解説草稿

佐伯が電気科学館へ採用されてから 10 年間ほどの間に行ったプラネタリウムや講演会の原稿がいくつか

保存されている。ここに2つを紹介しておく。署名は旧姓・本名の渡辺、恒男となっている。



図1. 昭和16年(1941年)10月のプラネタリウムの話題「衛星を巡りて」の解説草稿。9月に解説員として採用されたばかりであり、初めての解説にはこうした作業は欠かせなかったのだろう



図2. 昭和17年(1942年)1月のプラネタリウムの話題は「地球とガリレイ」だった